

分科会Ⅱ「多様な暮らし」「観光を多彩に」

日時：11月5日（金）10：00～12：00

会場：「道の駅十津川郷」

参加者：村内7名・村外5名・zoom村外2名・アドバイザー2名

【自己紹介】

—村内から—

・地域おこし協力隊として活動。パソコンとインターネットさえあれば仕事ができる環境が出来上がってきている中で、知らない土地にきてどんな仕事ができるのか？そんなときにコンシェルジュとしてアドバイスしたり、空いた時間に草木染など体験したり、観光業の派生を期待していきたい。

環境整備をしてどんなところを遺せるのかを準備していきたい。

・6年間山の仕事、その後役場で仕事。村で何かできないか？ということで「山の家」を経営。スローライフをもっと知りたくて参加した。

・4歳の息子、主婦、島根県雲南市出身、結婚で村へ。

・建築業、大工。「いこら」で週1回土曜日「ひだまりカフェ」11時半～15時。パスタや趣味で作った小道具を販売。季節にあった山菜の天ぷら、お食事など。鶏のから揚げ。木のスプーンも作る。観光にもかかわっている、空き家のイノベーションもしている。

・生まれて中学までは十津川、高校は奈良、大学は名古屋、仕事1年で子どもを出産し帰ってきた。

・宿泊施設を運営している。元役場で40年勤務。53歳で退職、このままでは潰れるのではないかと何か役に立てないかとクレーンやダンプなども操作する。新十津川との交流も熱心に行っている。



・民宿「杉の原」、ずっと十津川に生まれ育った、子ども2歳と4歳、祖父祖母と同居。コロナの影響もあり1日一組限定でやっている。毎日、お客さんをいれるより単発で入れている。谷瀬でほかにお宿がなく、仕事で来村された方など、できる範囲で。

・中学まで十津川、結婚を機に帰ってきた。お勤めの気力はなくなり子どもを見ながらクッキーなどをつくる。「空中の村」などで販売、「いこら」で、コーヒー（十津川ブレンド）、クッキー・ケーキなどを販売。木曜日に。

—村外から—

- ・役所、農林商工部長を退職して「青洲道の駅の駅長」。果物の着ぐるみの帽子をかぶり“フルーツの開発部長会議”なども動画で紹介。役所全体でフルーツでまちおこしをした。
- ・両親が営んでいた衣料品店を経営。地域の活動や、スローライフの活動も。
- ・紀の川市観光振興課、市民ワークショップを36回やった。猫の駅長が有名、今は紀の川フルーツ観光局。「空中の村」でフワフワを体験してきた。
- ・「心葉」主宰、日本の歳時記、お祭り、神道仏教系を教えている。「空中の村」、「玉置神社」「吊り橋」など訪れ、良かった。
- ・「スローライフ旬の店」で、7月は野迫川村の榎、8月は越谷藍染の手ぬぐいを紹介。十津川村は温泉もよく心も体もあたたかい、帰るのがさみしい

【暮らしについて】

- ・ゆっくり散歩道を歩いていて子どもたちと大きな声で挨拶ができるという環境がいい。
- ・小学校3年の孫娘から山に連れて行ってくれといわれてうれしかった。松茸を探しに運動靴で往復2時間、山を歩くのがほとんどで松茸を探すのはポイントを教えて10分。本当は



山は地下足袋のほうがいい、そんな教育ができるといい。今は危ないから川に行くなということになっているが、魚の習性を身につけるということも教えられる。山村留学では流しそうめんや薪で生活をする。都会の人は五右衛門風呂などを体験すると、「また来ます」と感動する。

・「イモたばり」という、お月見の時におやつをもらい歩く昔の風習が復活、この古くて新しい体験がいい。声をかけられるというのがう

れしい。

- ・端材を民芸品に加工している。手にもって木のぬくもりを感じ、わかってもらいたいと思って作っている。ネット販売もやっている、「いこら」でも販売、日曜日朝市でも。たまに売れる。

・ワークショップで木工品を自分で作ってもらい、ものづくりの大変さを一緒に味わってもらうのもいい。時間がゆっくり流れているのが良い。ここでは暗いことの怖さを覚える、でも美しさも知ることができる。

・「子ども、みといたるで」と、近所の人が言ってくれるのがうれしい。声をかけてくれるのがありがたい。帰ってきてよかったと思っている。

・部屋の電気を消して、空を見る。全部“星”という驚き。蛍も飛んでいる、たまにお酒を飲みすぎて蛍が飛ぶ時もある。取材をたくさん受けている。宿泊はコロナ前は、8月は1か月140人くらいだった。地元の盆踊り32曲、全部覚えている。地元8割の人は踊れる、楽譜なし、アカペラで締め太鼓のみ。歌はおなじだが、大字ごとに、みんな違う踊りだ。これを大事に伝えていきたい。

- ・だれかにあったら挨拶しなさい、と育ってきたので子どもたち



にも教えている。たしかに、まちの子どもたちは人を警戒していると感じる。谷瀬は、現在こども7人、冬に2人増える。小さな集落に子どもがいるのは賑やかでいい。移動保育所みたいに、畑・田んぼ体験ができる。稲刈りをしたいという子どもは、前日からヘルメットをかぶっているくらい楽しみにしていた。本当の外部の人を受け入れる体制がまだできていない。少人数ならできるかもしれないが、多く来てしまったら手が進まない、兼ね合いが難しい。酒米の専用として作っている田んぼは商売としてなので使えない、体験専用で田んぼをつくれればいいのかと思う。

・家の中にいると子どもに小言を言ってしまうが、外にでて自然の中にいると子どもがのびのびしている。この子どもの芽をつんでしまうのは私なのかな？と考える。地下足袋をはいて4歳児が、角田さんや祖父と山を登った。親とはなれて参加したことで子どもの目の輝きもちがっていた。

【観光について】



・これまでの観光は行きたいところに行って、食べて、次の場所に行った、忙しい観光だった。十津川だからこそその観光は考えるまでもなく「立ち止まってもらう観光」だと思っている。行き詰っている人が世の中にたくさんいるなかで、十津川は1時間半でかけ巡る旅はむいてない、立ち止まってコーヒーを飲んでホッと

する。ワークショップでスプーンを作って山をみて2～3時間を過ごすところだ。東京に戻ったとき、長い時間滞在することによって生まれる、自分のストーリーや新しい気づきなどが楽しく感じられるだろう。何もないからこそつくれる場所。観光というより「旅」なのではないかと思う、こころもからだも豊かに、哲学的に教えてもらえる場所だ。

・十津川村はカメラを通して良さがわかる、暮らしの中にも良さがある、玉置神社にも祭りがある、地域にも祭りがある、いろいろなことを体験できるツアーが良いと思う。まかないはなく、施設だけを貸出するという「山の家」で、なにもないのが良い。星もきれい、料理を作って、飲んで、食べて、しゃべる、のんびり感がよくてリピートが多い。経営的にはもうからない、1泊4000円。年間200万くらいで世話をしたり、光熱費もかかりもうからない、お年寄りのお遊びではあるが。

・「十人十旅」というツアーを組んでいる。始めて間もなくコロナ禍になってしまった。一日では十津川はまわりきれない、泊まってもらう。タクシー会社、旅館と組んでいる。インターンの方が十津川を気に入ってくれてコロナが落ち着いたたらまた来てくれるということになっている。

・滞在して経験してもらうのが一番いい、角田さんもいろいろやってくれている生き残りが一番大事。

・十津川に帰ってきてから、遊びに来てくれる友達もいるがコロナ



が落ち着いてからと言っている。母が SNS、ネットで雲海、玉置神社でのまかない、御朱印などの写真をアップしている。ネットをみて来られる人が結構いるので、もっと活用していたほうがいい。

・十津川温泉は源泉かけ流しが一番メインだと思う、もっと活用していただきたい。平均すると2泊から3連泊が多い。

・最近ゆっくりではなくなっている感じがする。吊り橋まではきてもらえるが、村のなかまで観光客はこなかった。「ゆっくり散歩道」が出来て、集落まで観光客がくるようになった。それが来村者のマナーが気になる、竹の筒に、ジュースのお金を入れるのが100円でなければいけないのに1円という人がいる。ゴミなど置いていくなど、がっかりすることもある。展望台などまで来て良かったという人もいるので、それは嬉しい。

・お土産が欲しい、会社に配りたいけど商品がないな・・・、という感じ。クッキーもお土産になるかもしれない。



・皆さんの熱い気持ちがひしひしと伝わってきた。紀の川市で観光に携わっていた。私が考える6次産業化はすべて「人」が大事である。1次があり、2次があり、提供する人、情報を発信する人、が上手に連携すること。一つ一つ皆さんのやっていること、素晴らしいことが、点と点、それを線に繋いでいただければと思う。その線をつなぐのが観光の6次化と

考え、それができれば十津川の観光となるのではないかと思う。紀の川では23年やってきて、「フルーツの紀の川」になっている。十津川の頭文字を使って「遠くても、とっても素敵な村、いつでもみんなで何度でも来たくなる村、頑張り屋さんが多い村、私たちもゆっくり十津川村」

・掛川の地元にお土産物がないと感じていた。自分たちは、里山でとれた栗を使い、市民活動の一環で栗焼酎を作っている。掛川市を語るうえで、栗焼酎が一つあることにより掛川のストーリーをもっと語ってもらえる。住民が携われるようなもので出来たらいいのではないか。点と点を線でつなぐ、の一つが自転車。住民が自分の言葉で掛川を語る、また来年もこの人に会いに行こう、など自分の言葉で語れることで自分が商品になる。

・結婚を決めたのが谷瀬の吊り橋だ。蜂蜜の瓶のそこまでスプーンが届く木のスプーンを、以前、川上村で手作りで作った。だから木工はいいと思う。「ゆっくり散歩道」で地域の方から温かみをいただいた。どっぷりと十津川にはまっている感じだ。地域のゆたかさ、暮らしをおすそ分けしてもらっている。観光ってその地域にあるもの、そこに暮らしている人から、その豊かさをちょこっとおすそ分けしてもらおうことだろう。

・観光の観という字は「心で見ることだ」と教えてもらったことがある。まさに心で見ると

光というのはここにあると感じている。次に光という字がつくので、光というもので見る観光だと思っている。

・女が仕事をするということは大変なのに、衣食住を仕事にしているのは本当に大変だと思う。点と点をつなぐという視点で考えると、可能であれば谷瀬にブランコを一つ置く、そして「空中の村」にもあるよ、子どもたちがもっと遊びを広げていく。もう一泊しよう、足湯に行こうなどとなるのではないか。十津川に来た人を逃がさない、リピーターを増やしていけばもっと楽しく仕事ができるだろうと思う。

・十津川という言葉をもじっていただき、ありがとうございます。役所に40年いた、「遠都川」といわれていた古文書がでてきていたのを思い出した。良いことを言ってくれた。

・本当の意味の自分を見直すという、「自分修行の旅」ができる。十津川村は裸の自分と付き合っただけのような気がする。

・十津川の豊かな自然のなかで、外で遊ぶのが良い。でも十津川に住んでいても、十分体験しきれていない、すべてを知らないから味わえないことがある。助けあえる、声掛けあえるのが都市部にはない、十津川の文化を魅力に感じる。となりの家に遊びに行くなど、子どもを自分の家だけで育てなくてもいいという環境が素晴らしい。

・畳の廊下を子供が走り回り、おじいちゃん・おばあちゃんが追いかける。この様子を見るのも観光の一つだ。

【アドバイザーから】



観光が多彩になっている。若い人の検索の方法も変わってきている。昔だったら気づいてもらえなかったことも、今は気づいてもらえていると感じる。十津川しかないこと、それを強みにしたい、活かせたら良い。村のなかの人たちがおすすめを各場所、場所で紹介しあうことにより広がっていく、ちょっとずつ繋がっていったら素敵だと思う。最近は「暮らすように旅する」という言葉が出てきている。体験したい、滞在したい、暮らすように、助けあう文化、何でも作ってしまう、お互いあげる文化とか、1回でも感じられると、また行きたいとなる。十津川村の蜂蜜は村の中の花のはち蜜だよとか、みんなで手作りしているお茶なんだよとか、もっとストーリーを伝えていけばよいお土産ができるようになる。今や観光協会では何かやってもらえるのを待っているのではなくて、私たち一人ひとりが観光協会だ。暮らしを丁寧に紡いでいくところが観光振興につながる。

